

谷沢永一著『近代日本文学史の構想』書評

保 昌 正 夫

谷沢永一氏の『近代日本文学史の構想』（三十九年十一月晶文社刊）は読みのある一冊である。これがまずこの書物を読みとおしてのいつわらぬ実感だ。ここに収められた論考のいくつかはその発表の都度読んできたし、ちょうど一年前、この本を贈られた際、一とおりに読むということはしたのであったが、それが一とおりに読み、かいなで読みであったことがあらためて痛感された。この一冊は飛ばし読みや斜め読みを許さぬ内容と、そして気迫を有っている。新刊紹介だけで放っておくことのできぬ一冊なのである。

これが世に問われてはほぼ一年を経たことになるが、この間、この著は少なからず書評の類に取り挙げられ、反響、批判のごときものも在った。いまそれらのうちのいくつかにあたりながら、あらためてこの書がかえりみられるということもさいわいと言ってよいだろう。それにまたこの書物に収められた論文の一、二をめぐっておのずから回想されるような事がある。それも個人的な間のことではない。この一冊の成り立ちに関して注意されてよい一面かとも考えられるので先ずその辺りからはいっていくことにしたい。

「あとがき」にも著者自身が触れていることだが、この書の「明治三十年前後文学状況の背景」は昭和三十七年四月、近代文学懇談

会の例会での報告を基に執筆された一編である。いま『近代文学懇談会会報』第十六号（三十七年六月）をみると、その報告の司会に当たった平岡敏夫氏が、「谷沢さんの報告はたいへんなものだった。うかがっていて問題意識をすごくかりたてられた。明治三〇年代の研究史をやり、その到達点をあきらかにするというきわめて正統的主体的な報告を出されたのだが、従来本気になってやるつもりなら日清戦争・ナシヨナリズムの性格規定をふくめてのこの種の作業は絶対に欠かすことができないはずのものだったのだ。」と「感想」を寄せている。その「たいへんな」印象をいくぶん野暮ったく私流に例会記風にしるせば、「まず谷沢氏は会員三好行雄、西田勝、伊狩章氏らの明治三十年代文学に関する諸論を挙げられ、日清戦争についての社会経済史的認識の必要を説かれ、（報告のおわりにちかく労働派、講座派、歴研グループ等の日清戦役把握の方法について紹介、批評された点も注意をひいた）、またこの期文学の景況をかえりみるにあたってナシヨナリズムという用語をあつかも信玄袋のごとくに用いて何もかも一緒くたにその中にこめてしまうような傾向に注意された。谷沢氏の報告は後に掲げる平岡氏の感想にもみえらるとおり幅ひろい視野に立つての周到なものであり、明治三十年代

文学史の統一的把握のテコとしてこの期ナシヨナリズムの二面性を克明に説かれた事、この期文学の多元(面)的考察のかつこうの存在として柳田国男が考えられる点を指摘したことはことにも印象的であつた。中村光夫の『挫折』をはじめかかずかずの論究、史観等に言及されたこともその準備をおもわせるものがあつた。」といふことになるのであるが、この印象は「明治三十年前後文学状況の背景」を読んでもほとんどかわらない。おのずからな回想が催されるといふのもまったく自然であるところであらためて思うのである。平岡氏のいう、「きわめて正統的主体的な報告」はおなじ『会報』の「報告要旨」の終わりに谷沢氏みずからが、「当日時間の制約の為言ひ残した点を含め、関西大学『国文学』の次号に、私なりの問題整理を詳論したい。」と書き添えたそれ——「明治三十年前後文学状況研究史覚書」(『明治三十年前後文学状況の背景』)になると一層の度合いのものとなつた。しかもそれはこの一編のみに限られたことではない。『近代日本文学史の構想』に収録された各論の成立過程を「あとがき」等によつてあとづけてみると、著者が極力「言い残し」の残らぬ「詳論」体に仕上げるべく努めきたつた跡は随所に相当以上に歴史と看取されるのである。この一冊の特徴とも見られる「注」のごときも単なる注記に終つてはいない。そこには「幅ひろい視野」と同時に潔癖な評価が読みとれる。「正統的」にして、なお「主体的」な方法は『近代日本文学史の構想』の「構想」全般に行きわたるものである。

『近代文学懇談会会報』からの長しい引用を敢てしたのも、ことはそれがこの書の全体にかかわると判断するからである。たとえ柳田国男という存在への関心はこの書物の一章をなす『時代ト

農政』前後」から最もあきらかにうかがわれるところであるが、冒頭章「日本近代文学の存立条件」にも柳田を「登場」させて、その注意のいわれをより大きな観点からまずもつて説くのである。このように見てくると、「日本近代文学の存立条件」、「明治三十年前後文学状況の背景」、「時代ト農政』前後」とひきつづく三章はその配列どおりに日本の近代という時代と社会とを背景とする文学の状況をまきしく一連の関心のもとにとらえている論調である。

これら三章にはじまる第「I」部と「私小説論の系譜」にはじまる第「II」部とをマクロ、ミクロの關係においてみているとも受けとられる書評(島田厚氏・昭和四十年二月『近代文学懇談会会報』第三十二号)もあつたが、この二つの意識はこの書の各編に両立、併存してみられるところで、むしろ「I」、「II」の分括は小笠原克氏がそれとなく見たように(昭和四十年『文学』一月号)、近代——明治と現代——昭和といつた、おおよその時代的観点によるものとしたほうが当たつていようか。しかし、それにしてもこの「I」、「II」の部だては必ずしもすっきりした形には受けとりかねるところがある。

巻頭の「日本近代文学の存立条件」には「日本近代社会」における「日本近代文学」の成りたちと在りかたを日本資本主義の特殊性の分析をおし、ことにも近代日本の農民層の階層としての性格に深くかわるものとして掌握して行こうとする意欲的な姿勢が認められる。ここにも前引の言葉を再確認する意味でまた引くならば、「社会経済史的認識の必要」が強調されていることにならう。そして、このことはたしかにこの一章が「一見、文学外的な社会分析のよう」にみえ(飛鳥井雅道氏・昭和三十九年十二月十四日『日本誌

『書新聞』ながら、その要は近代日本の文学史をイメージとしてではなしにイデオとして構想する以上は、——といった、「あとがき」の表現によれば「素志」、つまり不断の決意、覚悟がここに間われたことにほかなるまい。ここに著者の「ユニークな立脚点がしめされている」(同前)とする評が出てくるいわれでもあるが、私観によれば、それはなかなか「ユニーク」といった言葉では抑えきれぬ勢いを伴った体で、私自身の不勉強にもよることだが、一面その志の駆けりについて走れぬ感をさえ覚えた。しかし、この「素志」一章の肉付けにあたるものは以後の各章に示されているのであってみれば、ここではその勢いをこそ、むしろ壮なるものとして認めねばなるまいか。「問題意識をすぐかりたてられ」ることは事実である。それとてもこの一章に限られたことではない。第「Ⅱ」部の「現代文学史把握の諸形態」の一角をも含めて平岡敏夫氏が指摘、批判に及んだ(昭和四十年『文学』八月号「戦後二十年の『文学史』像」)のもその結果にはかならぬ。「日本近代文学の存立条件」一章に関しては生松敬三氏が日本近代文学会編集『日本近代文学』第二集(昭和四十年五月)にていねいな分析を示している。

なお一つ回想めいたことを挙げると、『時代ト農政』前後が『国語と国文学』に発表された時、ちょうど「学界展望」(『解釈と鑑賞』)というものを請負っていた私は、「ここまでたずねたものないしごと」としてこれを見、「柳田国男にあって抜きにできぬところ」をさながらに提示された憶えがある(昭和三十八年三月号)。しかし、いま「近代日本文学史の構想」でこれを見ると、「あとがき」に言うように、さらに「かなりの増補」が施されているのである。そして、なお氏はそこに「柳田国男の農政構想そのもの

を分析し位置づけする仕事は、私にとって、今後の課題のひとつである。」とも書きつけている。ことは「ここまで」ではなしに、これから、なのであった。著者の執心にあらためて脱帽せざるを得ない。これもいつの日であつたか、京都で一夕を共にした時、柳田に關する珍らしい資料を渡してくれながら、その人の検討をめぐって、『近代日本文学史の構想』の帯にしるされた著者の親友である開高健氏の言葉を借りるならば、「一草のそよぎをも見のがすまいとする語気で語ってやまなかつた氏を想起するのである。

この一冊の語氣——スタイルについて、パッショネートな、きびしい、つらい、などなどの評や感もあるわけだが、それは先の「素志」を掲げた以上、当然、必然の要請であつて、ことに昨今のよう近代文学研究の様相が混沌をきわめている現状にあってはこの語氣もきわめて貴重である。この書、ならびに前著の『大正期の文芸評論』(昭和三十七年一月塙書房刊)における研究誌スタイルの提出、確立は学界における一種の目ざましの働き、役わりに参与するものと言つてよいだろう。

『時代ト農政』前後」に続く「自然主義文芸批評の屈折」に關しては大久保典夫氏がその書評(昭和三十九年十一月二十八日『図書新聞』)に高く評価したが、先日も九州大学における全国大学国語国文学会秋季大会の公開講演(「自然主義と私小説」)で川副国基氏がその犀利な着眼を称揚されていた。第「Ⅰ」部にはなお一編「文学史と短歌史の問題」がはいっているが、こうした場合に短歌そのものが一首もはいつてこないのは、あるいは氏が敢て心がけられたところかとも察せられるが、いささか物たりない。実作(創作)をとりあげる。取りあげないはテーマにもよるわけだが、『大正期の

文芸評論』の奥付の「主要論文」欄にみられるような小説作品論を氏につづらせたいたい思いに駆られるのはけだし私ひとりではないだろう。

さて第「Ⅰ」部は、「私小説論の系譜」、「現代文学史把握の諸形態」、「昭和期文芸評論史の基軸」、「戦後文芸評論出発点の発想」、「文学研究の前提となる性知識の問題」の五章から成るが、私などにはまさに事典的価値をもつてうつる部分である（すでに実際年譜や辞典等で割りあてられた項目や書くのに厄介になっている）。しかもここにも、さきの引用にしたがえば、「中村光夫の『挫折』」、その他についての評価が豊富なボキャブラリーをもつてちりばめられているから読める事典としての興味のようなものもある。その惜し気もなく、ふんだんに資料を挙げ、全力投球を想わせる操作をみるようなたのしさに関しては小笠原克氏が前記の書評に最もよく伝えているので、ここでは割愛するが、一つ、やはりそのような思いを確かめさせてくれる体の一章「文学研究の前提となる性知識の問題」について心にかぶことを書きそえたい。『近代日本文学史の構想』は全体的にこれを見れば言うまでもなく硬派の書であるが、一面、博渉家である著者の神経が随所に反映し、行きわたっ

ており、ことにこの一章にはその物議りぶりが遺憾なく發揮されていて実にたのしい。それもふにやけ、うじゃやけたそれではないから、一種の安心のようなものがある。縮まりがあつての安心であり、たのしきである。そしてこのことはこの書の「あとがき」にヴァレリイやパウ・ベッカーが引かれたりしていることとおそらく無関係ではないような気がする。先月の初め、久しぶりに上京した谷沢氏を囲んで西田勝、福田久賀男、紅野敏郎氏らと一夕を過ごした時にもこの一編をめぐるの話題は奔騰した。こうしたところにこそ氏の「ユニーク」がうかがわれるというものだ。

とまれ、『近代日本文学史の構想』は専門書を気取った啓蒙書がなりに横行する現今の近代文学研究の中にあつて文字どおりの専門書と呼ぶに値する一著である。しかも、いさぎよい一書である。どこから打ちかかってこられることを辞せぬ気色がここにはある。たしかにこの一冊は一個の「戦後二十年の『文学史』像」として存立する。

(六五・一一・二三)

谷沢永一著『近代日本文学史の構想』（昭和39年11月1日・晶文社・三〇六頁・六五〇円）。

著者・谷沢永一氏は、本学助教授。

片山慶次郎 編集 『京舞 井上流歌集』 書評
平野健次